

理工学部體育會設立 75 年によせて

医学部體育會会長 貴志 和生



理工学部体育会の皆様、このたびは設立 75 年、誠におめでとうございます。

福澤諭吉先生は「福翁百話」の中で「先ず獸身を成して後に人心を養う」という言葉を残されているように、慶應義塾はこのように成り立ちから体育教育の重要性を意識しています。その流れの中で、慶應義塾大学体育会は 1892 年に福澤先生自身によって創設されたとされています。その後、慶應義塾大学は総合大学ではありますが、キャンパスが分かれている経緯、また理工学部と医学部は理系の学部としてカリキュラムの違いもあり、全塾の体育会と分離して矢上支部、四谷支部ができました。理工学部、医学部ともに全塾の人数に比較すると、当然のように体育会に参加できる数も少なくなります。しかしそれだからといって、部の種類が少ないというわけではない。当然のように部員の確保は困難となります。そのような状況で、前身の藤原工業大学から始まって、これまでの 75 年間、ここまで理工学部体育会を維持し、発展させてこられたそのご努力に敬意を表します。

さて、私は医学部体育会山岳部の会長も兼ねております。医学部は 2017 年に、創立 100 周年を迎えます。全塾の山岳部も 2015 年に創部 100 周年を迎えます。医学部体育会も医学部設立にほぼ時を同じくしてできましたが、その中で山岳部と野球部は早くから存在したようで、最初のころは全塾の山岳部と活動を共にしていたようですが、部員確保に難渋する時期も何度かありました。ある時は、医学部 6 年間の間、1 人の部員しかおらず、その部員が卒業する年になり、いよいよこれで長い歴史のある医学部山岳部も最期かと、腹をくくったものでした。その時、奇跡的に全塾の体育会で山岳部をやっていた部員が医学部生だということが判明し、彼が 4 年修了後 5 年目から医学部山岳部に入部してくれ、辛うじて廃部の危機を免れたという綱渡りのエピソードもありました。その後仲間を増やし、今は全塾 OB の方々がコーチとして、医学部山岳部の学生にきめ細やかな指導をしてくださり、部員も増え活気を取り戻してきています。また現在、医学部病理学教室の坂元亨宇教授が現役時代に、理工学部山岳部のキャシードラル峰遠征に参加させていただき、そこで学んだ知識

と技術を医学部山岳部に伝えてくれたりしました。全塾、理工学部、医学部体育会それぞれ独立はしてはいますが、困った時に頼りになるのは、やはり塾の仲間なのだなあと感じています。

この 75 年記念誌の原稿依頼が来たときに、はて、と思いました。医学部山岳部は何年になったのだろうと。医学部山岳部には名簿が存在しますが、最初の方の OB はほとんど故人になってしまっています。残念なことに、当初の記録も調べた限りでほとんど残っておりません。残存する名簿などから、そろそろ 100 周年をむかえるようだ、というのが先日行われた医学部山岳部 OB 会の結論でした。今回、理工学部体育会において、その初期から現在に至るまでの詳細な歴史をまとめられたことに大変感銘を受けました。歴史を知ることこそそれを愛することにつながります。医学部体育会も歴史をもう一度見直そうと考えています。

スポーツの技術の点で言えば、理工学部や医学部の体育会の平均レベルは、全塾の体育会にかなうものではないでしょう。しかし全塾、理工学部、医学部の体育会活動に上下はないと思っております。特に山岳部に関しては、対象が山であるだけに、その絶対的存在の前では、人間の活動は平等です。

また、理工学部や医学部は、それぞれ同じ学部の中の交流が強いので、人数が少ないということが、逆の強みになることも多々あります。医学部も卒業して医者になり、出張先や関連施設で塾出身の OB の先生に会って話をすると、二言目には親しげに「ところで、君は何部だったの？」などと聞かれます。それだけ OB も自分たちの所属していた体育会のクラブに、小さいながらも同じ釜の飯を食ったという同朋意識が芽生えてくるのだらうと思います。理工学部も同じではないかと思えます。そしてそれは、一生の貴重な人間関係につながります。

理工学部体育会設立 75 年。今後さらなる飛躍に向けて頑張られることを祈念致します。医学部山岳部もぜひ協力してゆきたいと思えます。おめでとうございます。